メソポタミヤの原史時代について

板　倉　勝　正

I

近着のケムブリッヂ古代史の新版を見ると C. J. Gadd[1] も M. B. Rowton[2] も，その年表のなかに従来全く神話・伝説の人物とされていた Gilgamesh の名を入れている。これは最近発見された Tummal Chronicle の記事と，Enmebaragesi の碑文を根拠にしているのである。[3]

英雄ギルガメシュの歴史性を最初に考へた人は先年来朝した S. N. Kramer であつた。彼は「大叙事詩」と一致しない，いくつかのシュメール語断片（例へば「ギルガメシュとアッガ」）をあつかつていて，それに気がついた。そして Th. Jacobsen はそれを基として，問題の「メソポタミヤの原始的民主制（1943）」を書いた。[4] 彼はその後更にその歴史的位置付けを試み，原始的民主制→原始的王制→原始的帝国（アッカド王朝）→官僚制的民族国家（ウル第三王朝）→世界帝国（アッシリヤ）といふシェーマを提案した。[5] 彼はその中で神話の世界（例へば世界創造＝エヌマ・エリシュ Enuma Elish）は原始的民主制の段階を反映し，叙事詩の世界（その中心人物はギルガメシュ）は原始的王制への過渡期を代表すると言つている。クレーマーは近著「歴史はシュメールではじまる」[6] においてシュメールの叙事詩について論じ，これを人類最古の「英雄時代」として把握する。[7] 彼によると南部メソポタミヤの最初の都市文明は，イラン系およびセム系の二つの要素の相互影響の下に形成された（前四千年紀末）。これはセム系要素の優勢な「第一帝国」ともよぶべきものであつたが，そこへカウカサス方面から遊牧のシュメール人が浸透して来て，丁度後世のゲルマン人のローマ征服[8] と同様の経過を以つて，下部メソポタミヤの支配者となつた。その後彼らは文字を発達させ，政府を確立し，王朝をつくり，その或る者は短期間ながら「第二帝国」とよぶべきものをつくり上げた。このシュメール帝国もまた，以前のセム帝国と同様の経過をとつて，アッカド人サルゴンに亡されることとなる。そしてサルゴン（2300 B. C.）から逆算して初期文字時代 Early Literate Stage は約四百年前，すなはち 2700 B. C. にはじまり，原文

字時代 Proto-literate Stage は更に二百年前，すなはち 2900 B. C. 頃にはじまる。従つてシュメール人の英雄時代は 3000～2900 B. C. となる。シュメール人のメソポタミヤ出現は，従つて前四千年紀の最後の四分の一（3250～3000 B. C.），更にこれに先立つイラン・セム文明が五，六百年つゞいたとすれば，メソポタミヤ定住の最初は前四千年紀の最初の四分の一（4000～3750 B. C.）とならう。[9]

クレーマーは歴史的王朝への言及や，考古年代への比定を故意に避けているが，参考までにフランクフォートの作つた年表[10]によると，ウバイド期は 3900 B. C. に終り，ウルク期は 3900～3750 B. C., Proto-literate（前期，後期を含む）は 3750～3100 B. C., 初期王朝期は 3100～2425 B. C., 原帝国期 Proto-Imperial（ウル第一王朝，ラガシュ古王国を含む）は 2425～2340 B. C.（ここからアッカド王朝につゞく）となつている。クレーマーの仮説は，チャドウィックの「英雄時代」をモデルとしており，しかも先行する「第一帝国」が文字を持たないとするなど，諒解し難い点があるが，叙事詩の世界を歴史の世界にはめ込まうとした最初の努力として注目に値ひしよう。

以下「シュメール王名表」[11]はウル第一王朝以前をどう誌しているかを検討して見ることにする。

II

いままでメソポタミヤで知られた最古の歴史的碑文は，キシュ第三（？）王朝の Mes-ilim, ウル第一王朝の A-anni-pada, 同じく Mes-anni-pada[12] などであつて，いづれも考古学的に初期王朝期第三期（E. D. III）に属し，ラガシュ古王国（Ur-Nanše 王朝）の開始直前に当り，ほゞ 2500 B. C. 前後とされていた。[13] 従つて最古の歴史時代はエヂプト第一王朝の諸王（アハ=ナルメル）と共にはじまり，メソポタミヤのそれとは約五百年の差があると考へられて来た。[14] しかしエヂプト先王朝期末期の文化にメソポタミヤのウルク期，或いはヂェムデット・ナスル期の影響が大きかつたことは，諸家の一致して認めるところであり，[15] 先史時代に進んでいた文化が，何故歴史時代(文明)に入るのがおくれたかは大きな疑問であつた。

しかしシュメールの古い伝承，「王名表」に従へば，ウル第一王朝以前にすでに長い王朝の交替があつたことが誌されている。それによると「王権 nam-lugal」が天上から降つた時，最初の王朝は Eridu に樹てられた。その後，王権が Shruppak にあつたとき，「大洪水」がおこつて全地を洗ひ流した。「洪水後」最初の王朝はキシュ第一王朝（23 王，24510 年と 3 ケ月 3 日半）で，これは「武器もて撃たれ」[16]，王権はウルク

第一王朝（12王，2310年）に移つた。これを倒したのがウル第一王朝である。「王名表」に誌されたその初代の王，メス・アンニ・パダの碑文がウルの発掘から出土したので，ほゞこの頃から歴史時代がはじまるとされている。しかもこれ以前の王朝の諸王は，或いは数百年の統治年数をもち[17]，或いは後世の神話・伝説の主人公であるので全く実在しないものと臆断されて来た。

しかし「王名表」の記述も時代が降るにつれて歴史的確実性を増し，アッカド王朝以後の部分は出土史料その他によつてこれを確実に跡付けることができる。更に「王名表」の記述が，実は並立した諸王朝を一系的なものとして記述していることを考へ合はせれば，その伝承の確実性は今までに確定されたウル第一王朝までに止ると考へるべき理由は全くなからう。[18] 先づ「王名表」によつてこれに先行する二つの王朝を見て見よう。

ウルク第一王朝

ウル第一王朝の前に覇権を握つていたのはウルク第一王朝である。その王名および統治年数は次の如くである。[19]

1	Meskiaggašir[20]	320 年
2	Enmerkar[21]	420 年
3	(d)Lugalbanda[22]	1200 年
4	(d)Dumuzi[23]	100 年
5	(d)Gilgameš[24]	126 年
6	Ur-Lugal	30 年
7	Utulkalamma	15 年
8	Labašir	9 年
9	Ennundaranna	8 年
10	Mes(?)-ḪÉ (Sukhuškhede ?)	36 年
11	Melamanna	6 年
12	Lugalkiaga	36 年

一見して分ることは五代までは，いづれも後代の伝承で神・英雄とされているもので，統治年数も長く，これに対して六代以下はきはめて人間的常識的統治年代をもつ。前者と後者はギルガメシュの子（DUMU），ウル・ルガルによつてつながつているが，この「子」は子孫・後裔の意味に解することも出来る。[25]

ギルガメシュは全オリエントを通じて最も愛好された大叙事詩[26]の主人公であるが，

その多くの断片のうちに，どうしてもこの叙事詩の現型と適合しないものがいくつか発見された。いづれもシュメール語で書かれており，「ギルガメシュとアッガ」「ギルガメシュと永生の国」「ギルガメシュの死」などの六篇である。[27] クレーマーは「ギルガメシュとアッガ」を訳していて，はじめてその「歴史性」に注目し，ヤコブセンはこれを重要な手掛りとして問題の「メソポタミヤの原始的民主制」を書いた。[28] なほ彼がウルクの城壁を築いたことは叙事詩にも，また遙か後代のウルクの王シン・ガミル[29]の碑文にも記録されているが，これらはあくまでも伝承にすぎなかつた。ところが第二次大戦後このギルガメシュ（ウルク第一王朝）と，「王名表」においてはそれに先行するキシュ第一王朝，更にウルク第一王朝を継いだウル第一王朝の三者の先後関係を示す重要な碑文が発表された。所謂 Tummal Chronicle がこれである。しかしその前に順序として一応「王名表」によつてもう一つ前のキシュ第一王朝のことに触れておかう。

キシュ第一王朝

「洪水後」最初に覇権を握つたのはキシュで「キシュの王」の称号は，ほゞ後代の「シュメールとアッカドの王」「全地の王」に相応する。[30] その王名は他の王朝とことなり，シュメール人名とならんで多くのセム系人名（イヌ・ヒツジ・サソリ・ロバなどの動物名が多い）が見出されることは，歴史曙期における両民族の平和的共存を物語る伝承として注意に値ひする。[31]

その十四代は鷲に乗つて天上に翔つた牧人（sipa）エタナで，「全地を統一して王となり，1560（1500）年おさめた。」[32] 二十二代はエン・メ・バラゲシ[33]で「エラムを討ち，900年おさめた。」三十三代（最後の王）はその子アッガで，この時にキシュは滅びる。「王名表」以外でエンメバラゲシにふれているのはウル第三王朝のシュルギの「ギルガメシュ讃歌」で，ウルクを攻囲した「キシュの家」に対してギルガメシュが武器を取つて立ち，キシュの王，エンメバラゲシを打破つたことを歌つている。[34] アッガは「ギルガメシュとアッガ」において同様にウルクを攻囲して，ギルガメシュに打破られたキシュの王である。王名表ではキシュ第一王朝はウルク第一王朝に亡されるが，これらの叙事詩や讃歌はキシュ王朝末期の両市の争闘を反映しているものと解してよからう。またエタナが「全地を固めた（統一した）」ことは，最初の武力的統一の記憶であるかも知れない。

Ⅲ

さてこの様に「王名表」によると「洪水後」にキシュ第一王朝，ウルク第一王朝，ウル第一王朝が次々に武力闘争によつて交代するが，叙事詩（ギルガメシュとアッガ）および讃歌（シュルギ）によれば，ウルク第一王朝の第五代ギルガメシュとキシュ第一王朝の最後の二人の王とは同時代である。そしてトゥンマル碑文を信頼すればこの同時代性は更にウル第一王朝の初期の王をも含むこととなる。

トゥンマルは全シュメールの主，エン・リルの聖市であるニップールの聖域，エ・クルの境内にある祠堂である。[35] 半世紀以前にペンシルヴェニヤ大学がニップールの発掘を行つた際の発掘主任ヒルプレヒトの私蔵テキストがイェナ大学に保管されており，その内からこの祠堂建設に当つた諸王の建設碑文が発見された。[36] これはキシュ第一王朝からウル第三王朝にいたるまでの間に，トゥンマル祠堂の修復を行つた記録で，ウル版（version）とニップール版の二種（前者三枚，後者七枚）があるが，その多くはこのイェナ・テキストの順序に従つている。[37] はじめの四つを摘記すれば

(1) キシュの王，エンメバラゲシはエンリル神殿を建てた。
その子アッガは，トゥンマル祠堂の第一回破壊の後，これを修復した。

(2) ウルの王，メス・アンニ・パダはエンリル神殿を建てた。
その子メス・キアグ・ヌンナは，トゥンマル祠堂の第二回[38] 破壊の後，これを修復した。

(3) ウルクの王，ギルガメシュはエン・リル神殿を建てた。その子ウル・ルガル[39] は，トゥンマル祠堂の第三回[40] 破壊の後，これを修復した。

(4) ウルの王，ナアンネ[41] はエン・リル神殿を建てた。その子メス・キアグ・ナンナは，トゥンマル祠堂の第四回破壊の後，これを修復した。

このテキストは勿論編纂物で一等史料ではない。しかもその形式が劃一的で，ほとんど同様の成句を用ひているところは，これが歴史物といふより，文学物であるとの感を深くさせる。しかしその製作年代が，「王名表」のつくられたイシン王朝期（前十九世紀）であること，メソポタミヤの伝統としてかうした「建設碑文」の歴史的順序にはほとんど誤りがないことなどは，その史料性を重視すべき一つの根拠となる。

この少くとも「歴史性」において相当高いと思はれる建設碑文に，従来確認されている王名とならんで，ギルガメシュ，エンメバラゲシ，アッガなどの名が見出されることは，すこぶる重要である。更にディヤラ溪谷のカファジェから出土したエンメバラゲシ

の碑文は，従来知られた最古の王名を，ウル第一王朝から一挙にキシュ第一王朝まで引上げたといつてよからう。[42]

Ⅳ

メソポタミヤにおける文字の発生は，ウルク期後期 (Uruk V, IV) までさかのぼる。これに Jemdet Nasr 期 (Uruk III) のものがつゞき，ついで明かにシュメール語で誌された Ur Archaic Text (E. D. I) と Fara Text (E. D. III) とが現はれる。[43] そしてエンメバラゲシ碑文 (E. D. II) はその中間に位する。[44] 「王名表」の歴史的信憑性は，少くともこの時期 (E. D. II) までは遡りうるやうになつたと考へてよからう。[45]

エンメバラゲシ碑文やトゥンマル年代記は，キシュ第一王朝末期からウルク第一王朝への過渡期についての伝承をある程度歴史的に傍証したものと考へられる。[46] またキシュ，ウル，ウルク，シュルッパクなどで確証された「洪水層」はウーリの主張するところに従へば，神話，叙事詩，王名表に誌されているあの「大洪水」であるといふ。[47] 地上最初の王朝と伝へられるエリドゥ王朝についても，戦後の発掘によつて明かにされた様に南部メソポタミヤ最古の文化層（アル・ウバイドより更に古い）が出土しているし，更に歴史時代に確証される水神・文化神エン・キの祭祀の原型が，最古の時代から連続していると考へられる点から言つても，[48] 「王名表」は或いは南部メソポタミヤ最初の定住の記憶を正しく伝へているのではないかと思はれる。「エンメルカルとアラッタの領主」なる叙事詩において，ウルクの王，エンメルカルが，しきりにエリドゥ市とその守神エン・キ[49]，更にその神殿エ・アブズに言及している[50] のも，かうした記憶の反映ではないか。

古文字学と比較層位学と歴史的碑文とが一致すれば問題はないが，さう多くを期待し得ない現状にあつては，原史時代究明の上に，古い伝承である「王名表」や「叙事詩」の分析の果す役割はますます重要となるであらう。

(1963 Ⅲ 25)　(筆者は中央大学文学部教授)

註

1) The Cities of Babylonia (*Cambridge Ancient History* Vol. I, Chap. XIII), Cambridge 1962. 以下 Gadd と略す。

2) Chronology : Western Asia (*ibid.* : Chap. VI), Cambridge 1962. 以下 Rowton と略す。

3) 板倉「古代バビロニヤの紀年について」（中央大学文学部紀要　昭和 38 年)。

4) 板倉「メソポタミヤの原始的民主制について」（中央大学文学部紀要　昭和 34 年)。

5) 板倉「オリエントの古代国家」（学生社　古代史講座第四巻)。

6) S. N. Kramer : Tablets from Sumer. The Falcon's Press. Indian Wills, Corolado 1956. ただし引用はその British Edition : History begins at Sumer, London 1958 による。以下 Kramer と略す。テキストの出所は同書 p. 318 ff.

7) Kramer : Chap. 22.

8) クレーマーはチャドウィック H. M. Chadwick に従つてアカイア人，アリアン人，ゲルマン人をあげている。バビロン第一王朝を亡したカッシイト人（バビロン第三王朝）は，より適当な例であらう。彼らは日傭人夫として傭兵として次第に社会に浸透し，最後にこれを征服して終つた。

9) Kramer : pp. 272～284.

10) H. Frankfort : Birth of Civilization in the Near East, Bloomington 1951 (*Anchor* 1956), p. 138. ついでに H. Schmökel : Das Land Sumer, Stuttgart 1956 の年表をあげると

Urukzeit	c. 3000–2800	B. C.
Djemdet Nasr–Zeit	c. 2800–2600	〃
Mesilimzeit	c. 2600–2500	〃
1. Dynastie von Ur (Lagasch–Zeit)	c. 2500–2360	〃
Lugal zaggesi von Uruk	c. 2360	〃
Akkadzeit	c. 2350–2150	〃

11) Th. Jacobsen : The Sumerian King List, Chicago 1939. 以下 SKL. と略す。

12) いづれも王名表に見える。ただしメシリムの名はない。SKL., p. 181～2.

13) A. Scharff u. A. Moortgat : Ægypten und Vorderasien im Altertum, München 1951 ; H. Schmökel : op. cit. などの年表。

14) Poetz : Auszug aus der Geschichte, Würzburg 1960.

15) H. Frankfort : op. cit., Appendix ; A. Scharff : op. cit.

16) 洪水以前の王朝の交替は「話しかはつて」と表現されている。SKL., p. 61 (n) 116.

17) 洪水前の統治年数の最長は 72000 年，最少でも 21000 年。

18) ウル第一王朝からアッカド朝までは，歴史碑文の同時代性から比較的よく分つていて，その間約 2 世紀たらずである。「王名表」によるとこれを約 5000 年（その内キシュ第二王朝は 8 王，3195 年）と計算している。

19) SKL., p. 83 ff.

20) (太陽神) ウツの子,「領主 EN」にして「王 Lugal」。

21) 「ウルクの市を築いた」とあるのは，中心のエ・アンナ神殿地区から市域を拡大したの意。SKL., p. 85 (n) 108. 彼はまた「エンメルカルとアラッタの領主」なる叙事詩の主人公でもある。Kramer : Chap. 3. The International Affairs.

22) 或るテキストでは「ギルガメシュの父」とも誌される。有名な冒険物語の主人公。Kramer : Chap. 22. Epic Literature.

23) アッカド語でタンムズ。「タンムズとイシュタール」神話の主人公。記事として「エラムを討つた」とあるが (Oxford Prism : Col. II, 35～37, *Gadd* : p. 21), キシュの王，エンメバラゲシについても同様の記事がある。大洪水以前のバド・ティビラ王朝にも同名の王がある。SKL., p. 73.

24) クルラブの領主 EN, SKL., p. 81 (n) 132.

25) SKL., p. 60. 88 ff. ; Rowton : p. 55.

26) 最近のものでは A. Heidel : The Epic of Gilgamesh and Old Testament Parallels, Chicago 1953 ; A. Schott : Das Gilgamesch Epos (*Reclam's Universal-Bibliothek* Nr. 7235/35 a) ; E. A. Speiser (*Ancient Near Eastern Texts relating to the Old Testament*, ed. by J. B. Pritchard, Princeton 1950)。なほ I. M. Diakonoff の蘭訳およびチェコ訳への批評 (*Bibliotheca Orientalis* 1961)。

27) Kramer : p. 250. 295.

28) 板倉「メソポタミヤの原始的民主制について」(中央大学文学部紀要　昭和34年)。

29) Sin-gamil (b), *Die sumerischen und akkadischen Königsinschriften* von F. Thureau-Dangin, Leipzig 1907, p. 222.

30) Th. Jacobsen : Early Political Development in Mesopotamia (Z.A.=*Zeitschrift für Assyriologie und verwandte Gebiete* 1958, pp. 129～136) ; E. A. Speiser : Ancient Mesopotamia, pp. 50～54, esp. (n) 41 (*The Idea of History in the Near East* ed. by R. C. Dentan, New Haven 1955).

31) Gadd : p. 19 ; Th. Jacobsen : The Assumed Conflict between Sumerians and Semites (*Journal of the American Oriental Society* 1934).

32) lú kur-kur mu-un-gi-na, SKL., p. 80 f. ヤコブセンは the one who consolidated all lands と訳し，Gadd : p. 19 は who made fast all lands と訳している。

33) D. O. Edzard : Enmebaragesi von Kiš (Z.A. 1959) ; ibid. : Königsinschriften des Iraq Museums II (*Sumer* 1959).

34) D. O. Edzard : op. cit., p. 20～21 (Z.A. 1959).

35) R. C. Haines : The Temple of Inanna at Nippur (*Illustrated London News* 1961,

9, 9). メソポタミヤ最古の都市の一つ。全シュメールの「王権」を決定する「集会」は，ここでひらかれる。板倉「メソポタミヤの原始的民主制について」（中央大学文学部紀要 昭和34年）参照。

36) Kramer : Appendix A, p. 303～4.

37) E. Sollberger : The Tummal Inscription (*Journal of Cuneiform Studies* 1962).

38) 或るテキストはこれを第三回とする。これは「王名表」の順序と一致する。

39) Rowton はこれを筆者の誤りで，ウル・ルガル（ギルガメシュの子）と，ウルク第二王朝のルガル・ウル・エ（Rowton によれば Lugal-ur-e＝Ur-lugal すなはちウル・ルガル二世）を混同したものとする。Rowton : p. 65 ; Gadd : 巻末年表。なほ Rowton : p. 56.

40) 註 (38) のテキストはこれを第二回とする。

41) Na-an-né は A'anni-pada である。Rowton : p. 65.

42) 註 (3)。出土層は初期王朝期第三期の直上であるが，Delougaz はその書体から推して初期王朝期第二期とする。Rowton : p. 55 (n) 1.

43) Gadd : p. 3～4 ; Rowton : p. 56～58.

44) P. Garaelli によれば従来知られた最古の王，ウル第一王朝の Mes-anni-pada（これは初期王朝期第三期に属する「王墓」の直下から発掘された）とエンメバラゲシ（初期王朝期第二期）とは，一代位の差しかないといふ（Gadd : p. 17～18)。さうすると Tummal Chronicle の順序は正しいことになるが，Rowton はこれを否定している。(Rowton : p. 56)

「エンメルカルとアラッタの領主」なるシュメール語叙事詩によると，このウルク第一王朝第二代（ギルガメシュは第五代）の王は，「七つの山」の向ふのアラッタ（エラム？）と交渉する際に，使者が「口が重かつた」ので，口上書をもたせるため「はじめて粘土版に文字を誌した」といふ。(Kramer : Chap. 3., p. 58～9)

45) 「王名表」はエンメバラゲシ（キシュ第一王朝）とメスアンニパダ（ウル第一王朝）との間に，アッガ（625年）とウルク第一王朝（2310年），すなはち約3000年をおいている。たゞし 註 (18) を見よ。もう一つつけ加へれば，「バビロニヤ誌」の著者ベロッソス (c. 300 B. C.) が，自分の時代より少くとも2000年以上前の王名とその順序を正しく記録していることは，「王名表」の信憑性への一つの傍証にもなるであらう。

46) 殷墟発掘によつて史記の殷本紀の王の世系がほゞ正確に写されていることが分つたことなど考へれば，古い伝承の正確さといふものは意外に高いのではないか。ガッドは「王名表」をバビロニヤ太古史について「最も権威あるものと見なすべきである」といつている。Gadd : p. 16. 17 (n) 1.

47) L. Woolley : Excavation at Ur, London 1954, Chap. I.

48) (一行空)

49) EN•KI (*Reallexikon der Assyriologie* II, Berlin 1938). 人間に文明を教へた魚頭神オアンネスの原型であらう。別の説話によると「エリドゥその他の七人の聖人」が人間に都市生活と技術を教へて「エリドゥの聖なる掟」を確立して，その日以来人間は何も覚えることがないといふ。(C. J. Gadd : History and Monuments of Ur, Londen 1929, p. 11 ; G. A. Barton : Semitic and Hamitic Origins, Philadelphia 1934, p. 129.)

50) Kramer : Chap. 3., p. 61～2. 本来ならウルク市，イナンナ女神，エ・アンナ神殿のあるべきところに，エリドゥ市，エン・キ神，エ・アブズ神殿が出て来るのは，創世神話の主人公が本来エン・リルであるべきのが，バビロニヤ版ではマルドゥク，アッシリヤ版ではアッシュールになつているのと同様であらう。特にアッシリヤ版では，エン・リルをアッシュールに書き換へておくべきところを，筆者の不注意からエン・リルのまゝである部分が多い。このエンメルカル叙事詩のエリドゥの部分はそれに当るものであらう。